

## マルサス『人口論』初版二百年を記念して

In commemoration of the bicentennial anniversary of the 1st edition  
of Malthus' *An Essay on the Principle of Population*

(一橋大学古典資料センター主催講演会, 1998年7月23日14:00-16:00)

橋本比登志

HASHIMOTO Hitoshi

### はじめに

マルサス (Thomas Robert MALTHUS, 1766-1834) の『人口論』初版出版200年記念に当たり、お招き頂き有難うございます。本日は、先ずマルサス略伝をお話し、次いで初版『人口論』に見られる人口と経済学との議論を紹介し、最後にヴィクセルによるマルサス評価を紹介させていただきます。

### 1) マルサス小伝

マルサスは、1784年18歳でケンブリッジ大学ジーザス・カレッジに入学し、88年学士、91年修士、93年フェローとなりました。この最後の年にはオークウッド教会副牧師職をも得ました。89年は『国富論』第5版出版年ですが、この年のジーザス・カレッジ図書室貸出簿にはマルサスによる『国富論』の帯出が記録されています。おそらくこれがマルサスの『国富論』研究の始まりだったでしょう。出版されなかった処女作『危機』は1797年に書かれましたが、それを引用した友人たちのおかげで、以下の4断片のみが残っています。つまり、①一国の幸福度を現人口で計ろうとする W. ペイリー (1743-1805) に対して現在の大人口は過去の幸福度の所産であって、現在の幸福度を示さないこと、②労役所・老人ホーム・救貧税といった社会福祉策でなく、働き次第で家族を幸福にしようという確信と、一家団欒の夕べと、これらこそ貧者を健全な経済生活へ駆り立てること、③議会権・民権擁護のホイッグ党が中流階層に選挙母体を求めるべきこと、④非国教徒に対して国教徒同様の市民権を与えるべきこと。断片ながらこれら4点は31歳のマルサスの社会観を相当程度伺わせてくれます。『危機』については、拙著『マルサス研究序説』の付録Ⅲ (嵯峨野書院, 1987年) を参照して下さい。98年に彼は『人口論』を出版します。北欧旅行 (99年) 南欧旅行 (1802年) 後、03年第2版、06年『人口論』第3版、07年第4版、17年第5版、26年第6版を出版し続けました。04年にハリエット・エッカソルと結婚し、一男二女をもうけました。いずれも没年の34年に至るまでのこととなりますがマルサスは、03年以降はウェイルズビー教会牧師に、05年以降は東インド・カレッジの英国近代史および経済学の教授に在職しました。経済学の教科書として、マルサスが終生『国富論』を使用し続けたことは、08年の試験問題と30年の受講生インヴェラリティの講義録とにより立証されています (ジョン・ブレン著、溝川・橋本編訳『マルサスを語る』、ミネルヴァ書房、1994年、の付録「マルサスと『国富論』」を参照のこと)。他方、14年まで彼がマルサス版『国富論』の出版構想を抱き続けてきたことは同年のホーナー宛ウイショ書簡等からわかるのですが、この年にビューキャナン版が出るに至り彼はそれを断念しました。これらの事情から、マルサスの

『国富論』耽読・愛着が強烈であったと言えるでしょう。

マルサスは、10年頃地金論争に、15年頃穀物法論争に加わります。同年リカードは『利潤論』を著して、自由貿易の立場から英国の工業への特化を説きました。11年からリカードの没年の23年まで、マルサスとリカードは親交を続けましたが、しかし経済理論においてはことごとく対立し合いました。リカードは上の小冊子を基に17年に『経済学原理および課税』を、マルサスは3小冊子中の1冊『地代の性質・増進論』を基に20年に『経済学原理とその実用化』をそれぞれ著しました。両者共、『国富論』から出発しながら、価値論、地代・利潤論、そして恐慌論におきまして意見を異にしました。

34年マルサスは、クリスマス休暇にバースにある妻の実家へ里帰りしたのですが、心臓病により12月29日当地で急逝しました。遺体はバース寺院に埋葬されました。バース寺院の入り口には親友オッターによるマルサスの墓碑銘があるのですが、『人口論』出版200年記念の年にマルサスを偲ぶに当たり、ここでこれを引用するのが一番相応しいと思います。

「トマス・ロバート・マルサス師の墓誌。師は、経済学の社会的分野についての優れた諸著作とくに『人口論』によって、長年学界で有名であった。師は、あらゆる時代あらゆる国を通じて、最高の人物の一人であり、最も誠実な学者の一人であった。師は、生得の尊厳な精神によって、無知なる者の誤解や著名人の無視を超越して、自己の仕事が世の役に立つという冷静だが確固たる信念に支えられつつ、賢明にして善良な人々の賛同を得ることで満足しつつ、真理の探究と普及に捧げつつ、平穩にして幸福な生涯を送った。師の著作は、理解力の広さと正しさゆえに、不朽の記念塔となるであろう。師の諸原理の曇りなき完全さ、師の性格上の公平さと率直さ、師の柔和な気質、都会風の作法、心根の優しさ、博愛心と敬虔心、これらすべては、師の家族と友人にとっては、さらに大事な思い出である。1766年2月14日生、1834年12月29日没」(プレん前掲書、p.40)。

## 2) 初版『人口論』における人口と経済学

初版『人口論』はタイトル無しの19章から成りますが、それらに私は以下のようなタイトルをつけています。第1章大筋、第2章振幅原理、第3章狩猟・遊牧社会への振幅原理の適応、第4章古代と現代への振幅原理の適応、第5章救貧法とその改善策、第6章アメリカ植民地での振幅原理、第7章人口統計資料による振幅原理の補強、第8章ウォレス＝コンドルセの社会観批判、第9章コンドルセの人間観批判、第10章ゴドウィンの社会観批判、第11章ゴドウィンの人間観批判(1)、第12章ゴドウィンの人間観批判(2)、第13章複合的存在としての人間、第14章ゴドウィンの5命題批判、第15章儉約をめぐるスミスとゴドウィン、第16章国富と労働維持基金——スミス批判——、第17章富をめぐる重農主義とスミス、第18章神学論(知性覚醒論)、第19章神学論(徳性覚醒論)。これらは、第1部人口原理(第1章～第7章)、第2部社会体制優劣論(第8章～第14章)、第3部経済論(第15章～第17章)、第4部神学論(第18章、第19章)の4部にまとめうるでしょう。以下では第1部～第4部を概説いたします。

第1部の人口原理は、第1に人間生存にとり食糧は不可欠、第2に男女両性間の情慾は不変、という2公理から出発します。この2公理は人間の2大欲望が食欲と性欲であること、前者の充足で個体維持が、後者の充足で子孫繁栄(「生めよ殖えよ地に満ちよ」)が結果するということを意味しています。さて人口は、食糧さえ与えられれば、1, 2, 4, …(つまり $2^n$ )と幾何級数的に、食糧は(土地収穫逓減法則を農業技術の改善等によって補えるとしての話ですが)1, 2, 3, …(つまりn)と算術級数的に、それぞれ増加すると展開されます。第1公

理より人口・食糧についての両級数間のギャップは生じえないのですが、このギャップを生じさせないものとしてマルサスは2種の人口増加妨害論を展開します。すなわち、出生を左右する妨げ（予防的妨げ）と死亡を左右する妨げ（積極的妨げ）とです。前者つまり予防的妨げは、道徳的抑制と悪徳を内容とします。道徳的抑制は晩婚と節制を、悪徳は乱婚・浮気・墮胎・避妊・性風俗産業等を内容とします。後者つまり積極的妨げは、貧困とも称され、不健康な職業・苛酷な労働・極貧・大都会・不摂生・疫病・戦争・飢饉を内容とします。これら予防的・積極的妨げは、直接的妨げと言う名称で一括され、これらを生じさせる根底のものを究極的妨げつまり食糧不足と考えています。マルサス主義とは予防的妨げ中の晩婚・節制を内容とする道徳的抑制策を言います。国教会牧師の立場上、それしか提唱しえなかったことでしょうか。このようにして彼は3命題から成る人口原理を樹立しています。「第1に、生存手段が人口を制限する。第2に、強力な妨げが無ければ、そして食糧が増加すれば、人口は増加する。第3に、人口を生存手段の水準に抑制する妨げは、道徳的抑制・悪徳・貧困である」と。ただし道徳的抑制が明言されるのは第2版以降であること、そしてこれは次に述べる人間可完全化論と矛盾すると批判されることを断っておきます。

第2部の社会体制優劣論についてですが、ここにおいてマルサスはゴドウィンやコンドルセの人間可完全化論を批判します。彼らは、人間は生理的に進化し人間特有の理性が、生物と共有の感情をコントロールするようになる、と主張します。理性の発展は、一方で技術革新をもたらし（未耕地が豊富に残存しており、既耕地の改良は無限）、食糧を豊富にし、他方で性欲をしたがって人口を抑制する。利他心が利己心にとって代わり、自由競争でなく、平等主義社会が実現する、と考えます。これに対して、マルサスは、平等主義社会では「働かずとも食べる」ということから、一方では結婚・人口が奨励され、他方では労働の生産力が低下する。食糧対人口の割合である、一人当たり食糧は低下する。これに比べ、自由主義社会では「働かねば食えぬ」ということから、一方では結婚・人口が抑制され、他方では強い結婚願望から、勤勉・貯蓄が奨励され生産力は上昇する。その結果、一人当たり食糧は増加する。これがマルサスの社会体制優劣論であり、無論、自由主義体制を賛美しています。

第3部は経済学です。先に見ましたように、彼は『国富論』を愛読し、そのマルサス版の出版まで考えました。マルサスのスミス像は第15章と第16章に出てきますが、それは貯蓄即投資、そして経済成長のスミス像です。第2部でゴドウィンらの平等主義社会が机上の空論であると批判したマルサスは、すべての文明社会が資産階級（地主・資本家）と労働階級に二分されざるをえず、私有財産制度と利己心を土台とした自由主義社会へ必然的に移行することを説きます。マルサスは、第15章でスミス説の本質が資産階級の貯蓄即投資（節儉即善、浪費即悪）即経済成長にあることを捉えています。スミス説から見るとゴドウィンのいう資産家の吝嗇（＝貪欲）は貯蓄ではなく退蔵にほかならず、それは労働階級を失業させると考え、ゴドウィンの非難する資産家の浪費のほうがむしろ経済成長にそして労働階級の雇用に貢献すると述べています。この考えは後述の『経済学原理』になると、地主階級の浪費（不生産的労働者雇用や奢侈品購入）が有効需要要因として経済成長を支えるという説へと発展させられていきます。第15章末と第16章でマルサスは、農業（食糧）と工業（衣服・住宅等）のいずれに投資がなされるかにより労働階級の幸福（＝必需品あるいは労働維持基金と健康とから成るものと定義）が異なってくるという視点から、スミスが必ずしも農工バランス論を基礎とする資本蓄積論でないこと、もし一国の投資が工業のみになされるとしたら、資産家階級の奢侈品のみが生産され、

それは工場労働者の健康を害し、労働者階級の食糧を生産しないことになり、幸福の定義に反し社会の大成員を不幸にする、と説きます。後日、リカードウの工業立国に反対する根拠はこれとほぼ同じものです。

第4部、神学論。第1に、創造・遍在説。自然界の万物は神の創造によるものであり、それら被造物を通じ神は自らを顕わしている。第2に、精神（＝知性・徳性）覚醒説。この世に悪あるいは苦しみがあるのは、神がカオス状態の人間精神を覚醒させんとすることに起因する。人口原理もこのような神の配剤による。艱難は汝を玉にし、必要は発明を生む。第3に、永遠の破壊説。神の存在を認識し、神を礼拝するに至らぬ者は、不出来の陶器同然であり、陶器師がそれを打ち砕くように、神は不出来な人間を破壊するのである。以上がマルサスの神学論ですが、地獄説を否認した第3点のせいで、マルサスは国教会から異端視されることになります。

以上、初版『人口論』の4テーマを紹介しましたが、マルサスは第1部の人口原理をもって、第2部の自由主義社会弁護論、第3部の農工バランス必要論、そして第4部の自然宗教による啓示宗教補強論、を説こうとしたのでありましょう。

### 3) ヴイクセルのマルサス『人口論』評価

マルサス『人口論』初版出版200年を記念して、これまでわが国ではあまり知られていないスウェーデンの近代経済学者かつ新マルサス主義者ヴィクセルのマルサス『人口論』評価を紹介して本講演を締めくくりたいと思います。

J. G. K. ヴイクセルは、1851年ストックホルムで生まれ、数学者を目指してウップサーラ大学に学び（72年学士、85年数学論文で修士）哲学・数学・天文学・歴史・ラテン語・文学・北欧語・英独仏伊語を修得し、文芸クラブで活躍しました。80年に社会科学系の処女作『社会不幸論』を著し、一躍名を挙げました。この時すでにマルサス『人口論』に深く共鳴しています。不幸とは愛する者と同棲できない状態を言うとして定義し、大半の青年が不幸であると述べています。その不幸から逃れるために、飲酒や売春といった社会悪が生じると説きます。85～90年彼は、人口論を基底に据えつつ、英独仏に留学、多くの講義に出席、古典・近代経済学を中心に社会科学の図書を猛烈に勉強しました。「ベルリン1888年9月」と冒頭に記入のある「マルサス『人口論』読書ノート」（拙稿“Wicksell's Reading Notes: Malthus, An Essay on the Principle of Population”, *KSU Economic & Business Review*, no.25, 1998, 参照）が残っています。この時点でヴィクセルはマルサス『人口論』を本格的に読みました。89年アンナ・ブグゲと契約結婚し、2男をもうけました。彼女はノルウェー人で、後、国際連盟のスウェーデン代表として活躍しました。

91年彼は、フランス学士院の懸賞論文「人口の増加原因とその妨害因」に応募・入選します。この論文において、一方で食糧が不規則的増加を示している史実からみて、マルサスの等差数列論は偽である（昔の食糧増産率が大で、将来のそれがゼロに近づく議論ゆえ）と述べ、他方で百年・千年倍増論が無意味であるのに対してマルサスの等比数列論は25年倍増論であって、これこそが社会的諸悪を発生させるがゆえに、この人口法則こそ真であり、それは物理学の世界におけるニュートンの重力法則に匹敵するところの、社会科学の世界における根本法則の発見である、と高評価しました。ヴィクセルは短期倍増が社会悪を発生させると表現しますが、これは人口・食物ギャップが積極的・予防的妨げにより調整されるというマルサス説の別表現に他ならないでしょう。この論文ではまた最大可能人口と最適人口（一人の人口増が全体の福

社を不変にとどめるような人口水準のこと)の区別をして、後者に達するためにどうすべきかを論じています。かくてヴィクセルは、人口論が社会科学体系中の隅石であると考えました。それがために、妻の1896年の諫言(『金利と物価』の完成に精進し、人口問題に深入りするなどの諫言)を無視して、ヴィクセルが人口問題を論じ続けたのでありましょう。

ヴィクセルは、「人口論即社会科学の隅石」命題を實踐して、『経済学講義Ⅰ』(拙訳、日本経済評論社、1984年)の第1章を「人口の理論、人口構成および人口変動」としました。本書序文においては、「種族の繁栄に関しても個体の発育に関しても、人間は生産者となる以前の長い期間にわたり消費者であり、生産論においては、人間が生産諸要素の中の一つにすぎないのに対して、消費論においては、人間と人間の諸目的とがその理論の全部を構成する」がゆえに、経済学の全体系にとって人口論は不可欠な序文として位置づけられるべきである、と述べています。さらに人口論が経済学の隅石である理由をこう説明しています。「地代理論全体はもちろんのこと、資本蓄積および資本利子という最も重要な現象もまた、人口理論に基づいて樹立されるものである。大半の国々における現実的資本蓄積の中のとびきり大きい部分は、不断に増加する人口用として生産される住宅および他の調度品から成るのであるから、もし人口がほぼ定常状態にとどまるにすぎないのであれば、その大部分は供給過剰になるであろう。他方、まさにその場合に、新資本を蓄積しうる能力が、逆に、増大するであろう」と。そして本章でヴィクセルは、①マルサス人口論の本質が人口25年倍増説にあること、②その倍増を左右する要因は自然的(出生と死亡)と社会的(高所得を求めての人口の空間移動)とであること、③スウェーデン初めヨーロッパの国々の過剰人口を自然的要因だけによって減少させるには出生率の低下以外に道はないこと、これらを歴史的・理論的・統計的に論じました。さらに彼は、最適人口を、マルサス同様出生率の低下によって達成しようと考えました。ただしマルサスの晩婚説に代えて、新マルサス主義者ヴィクセルは、早婚・避妊説による出生率低下を提唱したのですが。とまれ彼は、マルサス人口論の最強の発展的継承者と言えましょう。なお、ヴィクセルの「過剰生産と過剰人口」(*Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft* 46, 1890)はマルサスやケインズに共通する概念で展開されていることを断わっておきます。

#### 終わりに

以上のヴィクセル見解からすると、マルサスは確かに人口論いや25年倍増説を経済学の土台としました。その点をヴィクセルは見事に看破し評価いたしました。核心をつかず枝葉末端に終始する批判の多い中で、ヴィクセルは正に核心に触れたマルサス評価を下し、さらにそれを最適人口論へ発展させていると言えましょう。そこで以下にヴィクセルの文章を引用して、本講演の結語といたします。

「人口問題を口にしない人はいないにもかかわらず、マルサスの大著とドイツ人リューメリンの…著作類とを除くと、人口問題に関する重大な書物は皆無同然である。…人口問題は、価値論、需給論、等々といった経済学のすべての学説にとってその基礎をなすものである。…」(フランス学士院への応募論文26ページ)。

御静聴有難うございました。

(京都産業大学経済学部教授)